

日中経済交流研究会新聞 会員に聞く

「型拔機製造の技術でグローバル企業に」

高精度型拔機専門メーカー 坂本造機（株） 坂本 進 さん

型拔機の製造というニッチな分野でトップランナーとして長年業界を牽引してきた坂本造機株式会社は、今年で創立60年を迎えます。中国（上海）・タイ（バンコク）を拠点に海外への販売は全体売上の3割程度にもおよび、海外OEM生産も始めています。日中経済交流研究会会員でもある坂本進さんに、これまでの経緯と中小企業のグローバルマーケットへの進出についてお話をうかがいました。



坂本さん【自社開発の型拔機1号機（昭和27年製造）を前に】

型抜き機とは

型抜き機とは、紙、布、ゴム、プラスチックなど金属以外のシート状になったものの型を抜く機械です。型抜き機によって作られている製品は、紙製品やプラスチック容器、スポンジ、文具、家電製品のパッキン、自動車のエアバッグ、さらには、携帯電話やゲーム機等の液晶ディスプレイ用の機能性フィルムまでさまざまです。創業当初は印刷物などの紙を裁断・打ち抜きする機械を製造していましたが、今ではクリーンルーム内でミクロン単位の精密さで高精度な型抜きをするハイテク機械も製造しています。

ニッチな分野で世界をリードする企業に

自社開発することにより、他分野への進出に成功してきました。多層に積み重なったフィルムの1層だけを打ち抜く「ハーフカット」技術や、CCDカメラや画像処理技術を利用した高精度な位置決め技術「APS（オート・ポジショニング・システム）」などで他社を大きくリードし、業界を牽引するトップブランドです。「この分野の市場は、現在100億程度の市場です。大手にとっては市場規模として魅力のあるマーケットではないので大手の進出もありませんし、競合他社も数社に限られます。そして専業でやってきましたので、常にお客様のニッチなニーズを敏感にとらえ、独自の技術開発に結び付けてこられたことが、先がけて海外進出を果たせたカギになったのではと思っています」と坂本さん。

坂本造機のグローバル戦略

坂本造機の海外への進出は、1980年代に貿易商社を通じ日系企業への納品が始まりました。車両関係・弱電関連の生

産拠点がアジアへ移り始めるにしたがって1990年代に入りシンガポール、タイ、マレーシアなどへ納品するようになり、その後中国へも製品を届けるようになってきたといいます。2000年を迎え、海外向けの売り上げが全体の約3割を占めるようになったので、2004年上海に駐在員事務所を開設。その後2011年にタイ・バンコクに駐在員事務所を開設し、翌年上海の事務所を法人化しました。

タイ・バンコクでは現地ローカル企業によるOEM生産も開始し、2014年にバンコクの駐在員事務所を法人化。現在はそこから他国への輸出も行われているといいます。坂本さんいわく「海外進出やグローバル化というと、格好良く聞こえますが、実際はいいことばかりではありません。言葉の問題はもちろんですが、人の問題、税金の問題、法律の問題、いろいろあります。しかし、今後も日系企業に限らず海外での生産活動はまだまだ続くと感じています。中国離れがすすんでいるかのように日本ではいわれていますが、莫大な消費地でもありますし、賃金は上がってきたとはいえ、中国での生産がすぐになくなるとは考えにくいと思うのです。設備投資もリーマンショック後は、一時期落ち込んでいましたが、ここ数年は伸びてきています。日本の中小企業の海外進出は、弊社もそうですが日系企業に頼り過ぎてきたのだと思います。もっとローカルの企業（地元の企業）にも目を向け、そうした企業と提携していくことでまだまだ進出のチャンスはあるのではないのでしょうか」とのことです。坂本造機の海外進出は、独立系企業でありながらも、独自の技術を開発し続けてきたことが、海外の企業から絶大なる信頼を得ることにつながっています。技術と知恵を持つ企業には、会社の大きさに限らず、まだまだチャンスはあることを学んだ取材でした。

まとめ：（株）ギャレークルー 合田